

は、実績を挙げ、これを説得力として、財源を求めなければなりません。

このように、図書館は、大学における教育研究に不可欠のメディアとして、常に利用者との対話を通して適確にニーズを把握し、種々創意工夫をこらして、利用しやすい機能を備

えることが求められております。今回、図書館報が発刊されることは、誠によるこぼしく歓迎すべきことであり、これが利用者と図書館の間の対話と交流の場となることを切に願っております。

図書館の役割



くろばね よしあき
附属図書館長、工博、
建築構造学

昭和25年と言えば、やっとうどんが自由販売になった頃です。その頃まで主食は配給制で、米やうどんは“米穀通帳”を出さないと売って貰えないことになっていました。この年に私は大学に入学しました。

教養部の学生は旧制高校の校舎で授業を受けましたので、図書館も高校時代のものをそのまま利用していました。木造の小さい建物の二階が閲覧室で、窓から手のとどくほどの近さにある木の葉が太陽の光をチラチラと反射しながら揺れていた光景を、今も思い出します。この閲覧室は、学生の談話室のような働きをしていました。ここで、弁当を食べたり、他学部の学生と雑談をしたり、デートをする奴も居ました。

当時、開架方式をとる図書館はまれで、本は借り出して家で読むのが普通でした。私も、教養部図書館を利用して数多くの小説を読みました。昔の本には伏せ字がありました。若い人には想像できないでしょうが、モーパッサンの「女の一生」にさえ伏せ字がありました。母さんの散歩道のくだりは、勿論、×××

黒羽 啓明

であったと思います。止むなく「女の一生」の原本を借り出したところ、伏せ字に該当する部分だけが真っ黒に汚れておりました。昔の高校生はこうしてフランス語の勉強をしたんだな、と感心しました。

その後、歳を経るに従って身边が忙しくなり、図書館から小説を借り出すことは皆無となりました。現在、もし図書館長という職に就いて居なければ、自ら図書館へ赴くことは年に数回しかなく、たとえ赴いたとしても、せかせかと駆けつけて極めて実利的な情報の断片を探すのがせいぜいであろうと、容易に想像することができます。図書館に行かなくても、研究室は情報の洪水です。この洪水に押し流されないで、うまく餌を取る魚が太るわけです。したがって図書館の第一の使命は情報の管理にあります。各種各様の魚に最も適切な餌を準備する仕事です。研究者や学生を魚にたとえて申し訳ありません。

昨年5月に私が図書館長に選ばれて当惑していた時に、「情報管理は工学部の先生が一番得意な仕事じゃないですか」と私を励ましてくれた同僚が何人も居ました。しかし大学図書館にはもう一つの重要な使命があります。それは文化の保存と提供です。文明とは金になるもの、文化とは金に無関係なものと、私なりに定義します。その文化とはほど遠い日常・研究生活を送ってきた私にこの様な使命が担えるのかと言う疑問が未だ晴れないでいます。私が教養課程に在学していた時には生活は誠に貧しかったけれども、豊かな思い出

が残りました。もちろん年齢のせいもあるでしょうが、文化と深くお付き合いできたのは、後にも先にも教養課程の2年間だけであったからではないかと思えます。文化を教えることが何の役に立つのかについては、考えなくてよいと思えます。文化は“役”とは無関係なものですから。しかし創造力のある人材を育てるためには夢を持たせないといけない、その夢を育てるのは文化である、と信じております。

旧制高校の気風が漂っていた新制大学の発足当時から40年も経った今、大学の教育体制はかなり形骸化してきました。一方、受験競争をくぐり抜けた学生は、やがて専門教育科

目を詰め込まれ、企業戦士として競争社会へ忙しく巣立って行きます。社会の価値観が物質文明にますます重心を移す中で、大学設置基準に新たに定められた「自己評価」では捉え難い文化を、如何に守るかに大学は苦勞することになります。このような大学にあって、図書館は文化のオアシスとしての役割を果たす必要があるでしょう。もちろん水を飲みたくない馬にはなす術がありませんが、飲みたい馬もたくさん居ます。このような馬に、文化の水をたっぷり飲ませてやらなければ、野蛮な馬ばかりが育ってしまうのではないかとひそかに恐れています。学生諸君を馬にたどえてご免なさい。

第8回特殊資料展を開催

平成3年11月13日(水)から15日(金)まで、『太平記の世界』と題する特殊資料展を自由閲覧室において開催し、15日午後には文学部工藤敬一教授の『中世の合戦と古文書』と題する公開講演会を2階会議室で行いました。

出品資料は総点数53点で、永青文庫寄託資料から「足利直義警護催促状写」、「足利義詮軍勢催促状」、「足利義詮感状」、「足利義詮守護職補任状」、「細川常久(頼之)書状」、「細川頼有諫状」など足利一族として活躍した細川氏の古文書や、「永源記」などの古記録、奈良絵といわれる色あざやかな挿絵入りの「絵

入太平記」(表紙に一部を掲載)、「風雅和歌集」、「新千載和歌集」、「神皇正統記」や「梅松論」などの写本、刊本類を出品し、阿蘇家文書から、「後醍醐天皇論旨」をはじめ、「足利将軍(尊氏・義詮・義満)御判御教書」、「足利直義御教書」、「高師直書状」、「恵良惟澄軍忠状」などを出品しました。

官方・武家方・佐殿方三派の文書を一堂に会した展観で、NHK大河ドラマ『太平記』の人気と相俟って、入場者数272名、公開講演会参加者数67名と盛況でした。

